

(別紙 2)

審査結果の要旨

氏名 有泉 優里

本論文は、日本語の会話でよく用いられる、男性的な文末と女性的な文末が、話者についての印象に与える影響を解明しようとしたものである。とくに文末の男性性・女性性(文末形式のジェンダー)が、話者の性別と一致しているか否かによって、話者についての印象がどのように影響されるかを実験的に検討している。

一般的に、男性的な文末を用いる話者については、女性的な文末を用いる話者の場合よりも、男性的な印象が形成され、女性的な文末を用いる話者については、男性的な文末を用いる話者の場合よりも女性的な印象が形成されると考えられる。本論文では、こうした単純な予測だけでなく、話者の生物学的性別と、用いる文末のジェンダーとが一致しない場合もとりあげ、このような場合には、生物学的性別と文末形式のジェンダーが一致している場合よりも、文末形式のジェンダーに基づいた印象がより強く形成されやすいことを予測している。つまり、女性的な文末を用いる男性は、女性的な文末を用いる女性よりも女性的であるとみなされ、男性的な文末を用いる女性は、男性的な文末を用いる男性よりも男性的とみなされやすいことを予測している。

本研究では、まず事前調査により、男性的な文末と女性的な文末とを確認している。そして、実験 1-1 と 1-2 において、文末形式のジェンダーにしたがって話者の印象が形成されやすいこと(文末形式のジェンダー効果)と、生物学的性別と文末のジェンダーが不一致な場合に、文末形式のジェンダー効果がより強くみられること(文末形式のクロス・ジェンダー効果)を確認している。次に、実験 2 と実験 3-1 と 3-2 において、文末形式のジェンダーによって変化する、話者についての印象と言葉遣いに関する規範との関係を検討した。これらの研究で、文末形式のジェンダーが印象に与える影響は、それが総合的に規範に反しているほど大きいことを見出している。次に、実験 4 では、こうした印象効果が生じる際の情報処理過程を取り上げ、クロス・ジェンダー効果が、文末形式のジェンダーによって活性化されたジェンダーと、生物学的性別に関する情報が調整される結果生じることが示唆されている。最後に、実験 5 では、認知者の居住地や年齢などといった個人要因を取り上げ、実験参加者の居住地や年齢層にかかわらず、文末のジェンダーにもとづいて話者の印象が形成されることを確認している。著者が主張するように、これらの効果は基準値シフト・モデルによってよく説明できている。

以上のように、本論文は文末形式のジェンダー効果およびクロス・ジェンダー効果の存在を一連の実験によって新たに実証したものであり、言葉遣いと印象形成に関する社会心理学的研究の進歩に大きな貢献をしたと考えられる。よって、本審査委員会は本論文が博士(社会心理学)の学位に値するものと判断する。